

# 大阪

あんなところ  
こんなところ

## 『船場』

東は東横堀川から西の西横堀川（現在の阪神高速環状線北行）まで、南は長堀川（現在の長堀通）から北の土佐堀川までの東西1キロメートル、南北2キロメートルの堀川に囲まれた地域を、船場と言うそうです。今回は、古くから商人の町として知られる、船場について調べてみました。

## 町の起り

船場の町は、豊臣秀吉が石山本願寺跡に大坂城を築城した時に生まれました。城の三重の堀を開削した折りに掘り出された大量の土砂が、上町台地の西側の低湿地帯や海岸部の埋め立てに使用され、新しく造成された地域が「船場」と呼ばれるようになったそうです。その後、大勢の家臣や武士達がこの地に集まるようになり、武具や食料品、生活用品等の需要が高まりました。そこで秀吉は、堺や京都・伏見から商人を強制的に移住させ、急速に城下町の整備を進めたのだそうです。船場周辺には船宿、料亭、両替商、呉服店、金物屋などが集まり、江戸時代には「諸国の賄所」として商業の中心地となっていきました。

## 地名の由来

船場の由来には、1、船着き場だったことから着船場の「着」の字を省いて「船場」となった。2、大坂城の馬を洗う場所で「洗場」と呼ばれた。3、よく戦場となった所から「戦場」と呼ばれた。4、砂場であったため「砂場」と呼ばれ、これが転訛し「センバ」となった。5、千の波が立つほど海岸線の複雑な地だったことから「千波」と呼ばれた。6、糶が行われるような交易の拠点だったことから「糶場」が転訛した。多数の説があり、特定することは難しいようです。

## 繊維の街

明治15年に、大正区で大阪紡績株式会社（現東洋紡）による日本初の本格的紡績工場の操業が開始され、原材料である綿花を扱う業者が続々と誕生しました。船場では「船場八社」と総称される有力系商が軒を連ねて躍進を続け、戦後、井池筋に千を超える中小の繊維卸問屋が集中。以前から繊維卸問屋の多かった南船場一帯と合わせ、巨大な繊維街を形成するようになりました。

当時の商家を偲ばせる「船場言葉」、大変美しい言いまわしを備えているそうですが、ほとんど聞く機会が無いのが残念です。



掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞